

## 「介護体験学習

(幸楽苑・デイケアセンターでの総合学習と関連した道徳の授業2)

### 「人のためにすすんで(街頭募金活動)」

\*平成十年度の附属小学校6年1組の活動を資料化

「この二つの国の名前を知っている人はいますか？」  
大きく広げられた世界地図の中で示された国は、日本からずつと離れた遠い国であった。

和夫のクラスでは総合学習の時間に二人のお客様を迎えることになった。近くの大学に通う留学生の方である。

その方々のお話の中心は、それぞれの国の子供たちのくらしぶりであった。

「わたしたちの国には、学校はありますが貧しくて通えない子供たちがたくさんいます。教科書や文房具などが買えないからです。家の仕事の手伝いをしています。」

「わたくしの国は、病院が少なく十分な治療を受けない人々が少なくありません。特に赤ちゃんや小さい子がなくなっていくことが残念です。」

まだ日本語は上手ではないけれども、真剣にお話をされる内容は、よく伝わってきた。

先生から、それらの国の生活がわかる写真や資料がいくつか示され、話し合いは続いた。ある写真には、砂漠のような乾いた土の上でやせ細った小さな子供が写っていた。わたしたちに何かを訴えているようで、和夫はまっすぐその子を見ることができなかった。

留学生の方々が話し合いの中で思わず涙を流されたのがきっかけで、「6年生のぼくたちにも何かできることはないか」ということが、話し合いの中心になった。

「わたしたちのおこづかいの一部を送ることはできないかしら。学用品を買うのに役立ててもらえればいいな。」という発言や

「不要な文房具や身の回りの物を送ってあげるのもいいと思うよ。そのようなお世話をしている人たちがおられるというのをお母さんから聞いたことがあるよ。」  
などには、賛成の声が多かった。

しかし明子の

「わたしは、商店街に立って、これらの国々の子供達の大変さを訴えて、募金活動をしてはどうかしら。みんな

で協力してやれば、もっともっとたくさん国際協力ができると思うよ。」

という意見には、教室が少し騒がしくなった。

「そんな恥ずかしいことはできないよ。」

和夫はとっさにそう思った。良い考えだとは思うのだけど、商店街で大きな声をあげて、募金をお願いすることに気が進まなかった。多くの人が協力してくれるかどうかとも不安だった。迷う気持ちが心全体をおおった。( )

結局話し合いの末、街頭募金もすることになった。そこでみんなで世界の国々の恵まれない子供達のことについて調べたり、呼びかけの言葉を考えたりした。

いよいよ、街頭募金の時が来た。

「募金をお願いします。世界の恵まれない子供達のためにご協力お願いいたします。」

みんな大きな声を出した。初めのうちは、わざと自分たちをさけるようにして通る人、「また、募金かあ。」といやな顔をして通り過ぎる人などが、気になって、和夫は「やっぱりやめればよかったんだ。」と、後悔の気持ちでいっぱいになった。( )

しかし、そのうちに小学生ががんばっているからと、励ましの声をかけてくれる高校生の人やわざわざ家までお金を取りにかえって募金をしてくださる近所の方もおられて、和夫は知らず知らずのうちに真剣に呼びかけるようになっていた。特に

「遠く離れた国の子供達のためにわたしたち日本の子供達が一生懸命やっているのを見ると、とても嬉しくなります。是非私も協力させてくださいね。」

と、手押し車を押したおばあさんが募金してくださったときには、和夫はとても温かな気持ちになった。自分たちが、そのおばあさんのやさしい気持ちを遠い世界の子供達に届けてあげられるような気がしたからだ。( )

無事に街頭募金も終わり、自分たちのお小遣いや不要品もあわせてユニセフなどに届け、和夫たちの総合学習は終わった。

和夫は、手押し車を押したおばあさんの優しい笑顔と励ましの言葉などを思い出して、国際ボランティアの活動をやってよかったなと思った。

(坂本哲彦)